

第三者の評価

2003年 イオン環境・社会報告書について



財団法人地球環境戦略研究機関
理事長 森島 昭夫

2003年度の報告書のタイトルは、これまでの「イオン環境報告書」から、「イオン環境・社会報告書」に変わっています。副題がついて、「サステナビリティ・レポート」となっています。よく知られているように、サステナビリティ(持続可能性)ということばは、10年前にブラジルのリオ・デ・ジャネイロで開催された「国連環境開発会議(UNCED)」で使われたものです。20世紀の大量生産・大量消費によって、世界の資源は枯渇し、環境は破壊されつつあり、このままでは人類は生存できなくなるので、環境保全と開発(発展)とを両立させる持続可能な経済社会を作っていかなければならないことが提唱されました。さらに昨年南アのヨハネスブルグで開かれた「持続可能な世界サミット(WSSD)」では、環境の保全だけでなく、社会の仕組みの変革が求められています。

今年の報告書は、こうした動きを受けて、イオンが、環境保全だけでなく、社会貢献をより重視する姿勢を明らかにしたのものとして高く評価したいと思います。とりわけ、これまでの報告書よりもいっそう「お客さまとともに」行動する方針を掲げていることを重視します。「お客さまとともに」開かれた経営を目指し、信頼される商品を開発し、また社会貢献活動や環境保全活動を行なうことが重要です。

小売業を中心とするイオンが持続可能な社会の建設に

貢献するには、お客さまに安全で環境に優しい商品を提供し、お客さまに環境にやさしいリサイクル型の生活を選択してもらうことが最も有効です。そして、お客さまにそのような選択をしてもらうためには、売場の従業員が十分に知識を持ち、必要であればお客さまに説明できなければなりません。

今年も店舗(今年は京都洛南店だけでしたが)を視察させていただきました。例年そうですが、イオンの理念が実際に現場にどのように浸透しているのかを知るためです。

安全・環境保全・リサイクルを目指したイオンの独自商品(PB)トップバリュの数は毎年増加しているように思います。売場もよく目立つところで、面積もかなりを占めています。売場の従業員もPBであることを認識しています。売筋もよいと聞きました。トップバリュには「共環宣言」とか「グリーンアイ」「SELECT」などのブランドがありますが、ブランドのデザインが洒落ているので、本当に環境に優しい商品や安全な食品であることを認識して選択しているのか、お客さまに尋ねたところ、衣類についてはよく分かりませんでした。食品については「安心だから」という答えがかえってきました。

廃棄物の減量・処理、トレイ等の回収についても積極的に行なわれていました。

今年の報告書に初めて現れた、段差のない(バリアフリー)、車イスの通行可能な通路の店舗の推進も、「環境・社会報告書」という観点から評価します。視察した店舗もバリアフリーで明るい店舗でした。

私がイオンの環境活動の評価に参加して5年目になりますが、イオンの持続可能な経営方針が確立し、現場でも実践されつつあることを喜んでいますが、今後いっそう従業員教育の徹底とお客さまとのコミュニケーションの深まりを期待いたします。

2003年3月31日

